

「橋幸夫（本名「幸男」）さんはお墓をとっても大切にされる方で、傳通院に建立したお墓ではご両親を供養していますが、熱海の自宅から東京に来るたびにお参りしていました。生前お世話になった方々のお墓参りにもよく出かけていて、特に自身のデビュー曲『潮来笠』（一九六〇年）をはじめ、数々のヒット曲でお世話になった吉田正先生（一九二〇～一九九八年、茨城県出身、日本歌謡界を代表する作曲家）の月命日のお参りは、できる限りスケジュールを調整して欠かしませんでした。彩石さんにつくっていただいたお墓にとっても満足していて、いつも丁寧に隅々まで水拭きしていましたね。結局、お寺のすぐ近くに部屋を借りたくらいなんですよ」

故・橋幸夫さんの奥様・真由美さんはそう話します。日本中に愛された国民的歌手で、書家・画家としても活躍した橋幸夫さんが逝去されたのは、まだ記憶に新しい今年九月四日のこと（享年82歳）。厳肅かつ荘厳に営まれた通夜・葬儀・告別式にはあわせて約千三百人が参列し、大スターとの別れを惜しんだ。葬式は東京・小石川にある名刹・傳通院本堂で執り行なわれ、真由

## （株）彩石の〈国産墓石物語〉 その1



# 「傳通院墓地の 橋幸夫さんのお墓」

羽黒青糠目石と真壁小目石など、  
心やすらぐお墓づくりを

故・橋幸夫さんの奥様の真由美さんと（株）彩石の大西正也社長（傳通院観音堂にて）。家族ぐるみのお付き合いで、橋幸夫さんの最期も二人で看取った

（株）彩石

本社：東京都文京区小石川3-3-7

tel.03-6801-8902

<https://saiseki.net/>



美さんの言葉にあるように、橋家の墓所も同じ傳通院の墓地に建つ。令和二（二〇二〇）年六月二日、生前の橋幸夫さんが建立したお墓で、（株）彩石（大西正也社長）が手がけた。

「幸夫さんとは、実は夫婦で入るお墓を探して島根などにまで墓地を見に行ったことがあるんです。でも、もともとご両親のお墓を設けてあった傳通院に改めて来てみたら、二人とも何かとても深いご縁を感じて。しばらくして幸夫さんが『傳通院でゆつたりしたお墓に建て替えよう』と考えてお寺に来たら、墓地で大西社長と偶然出会ったんですね。でも幸夫さんは以前にも別のお寺で大西社長にお世話になっていた、それも『すごいご縁だね』と（笑）。それから貫主様（傳通院住職）にご相談して、お墓を新しく建て替えました」（真由美さん）

もとのお墓は傳通院墓地内の古くからある墓域に建てられていたが、新しいお墓は（株）彩石が徳川家諸廟所を移設整備した跡地に新たに造成した区画に建てられた。もちろん、デザインもすべて一新しての建て替えである。アーティストで供養を大切にする橋幸夫さんと、真由美さ



東京・小石川の傳通院墓地に建つ橋家のお墓。2020年に橋幸夫さんが建立したお墓で、もともと同墓地内に構えていたお墓を新たに建て替えた。石は石碑・墓誌が羽黒青糠目石で、外柵・敷石が真壁小目石（ともに茨城県産）。ベンチは群馬県産三波石。石碑正面の「幸」と「俱会一处」の文字は、書家としても活躍した橋幸夫さんが書いたもの。繊細な筆の運びの強弱を手彫りで表現している（石の加工、文字彫刻は茨城産地）。花立ては特注品で、供花は年間契約で憐彩石が行なう。石碑の脇にちょこんと見えるのは、建て替え前の墓石（神奈川県産本小松石）で制作した童地藏（制作：宮城県・石神彫刻工房）。石碑前には真壁小目石でつくられた茶碗も置かれている。墓所は徳川家諸廟所に並び、傳通院と永代供養契約も結ぶ



2



1



4



3

1 もとの墓石（本小松石）で制作されたお地藏さん。可愛らしい笑顔で墓参者を迎える 2 三波石（青石）のベンチ。「お参りのときにゆっくり座って対話ができるように」と、真由美さんが望んで設置された 3 真壁小目石の外柵背面は橋幸夫さんが好んで描いた富士山をモチーフにデザイン 4 墓誌も羽黒青糠目石の割肌を生かす 5 石碑（羽黒青糠目石）の質感とボリューム感。前方には徳川家康の孫・千姫の廟所を望む 右 真壁小目石で制作した茶碗



5

んの思いも受けながら、大西社長が何度も打ち合わせを重ねてデザイン設計した。石は大西社長の提案で、『潮来笠』の舞台であり、その作曲者・吉田氏の出身地でもある茨城県産の羽黒青糠目石（石碑・墓誌）と真壁小目石（外柵・敷石）を採用し、茨城産地で加工した。

「幸夫さんが一番こだわったのは、石碑正面に彫った本人揮毫の『幸』の字の表現でしたね。また、浄土宗の教えに則して『俱会一处』（極楽浄土での再会を意味する）も自分で書いて、石碑の『幸』の字に添えました。お花をいっぱい生けられるように、大きな花立てでもデザインしていただき、特注していただきました。私が特に希望したのは、お参りのときにゆったり腰を下ろして故人と語り合えるベンチの設置です。大西社長は打ち合わせの段階から丁寧に寄り添っていただき、私たちの思いを引き出して、見事に形にしてくださいました」

文字彫刻も茨城産地で行ない、特に「幸」の字は手彫りにより、橋幸夫さんの筆の運びの強弱を表現した。また真由美さんが望んだベンチは、美しい青石である群馬県産三波石を茨城産



今年9月4日に逝去された橋幸夫さんの葬式（通夜は9月9日、葬儀・告別式は10日）は傳通院本堂で荘厳に営まれた。祭壇は富士山をモチーフにデザインされ、等身大の写真では多くのファンや友人らが最後の記念撮影をした。大西社長はそうした式の内容の検討、準備にも主体的に関わった（写真は橋真由美さん提供）



地で加工して据えた。羽黒青糠目石の石碑は原石の割肌を丹念に叩いて仕上げ、石本来の力強さとおおらかさを表現（彫刻面は研磨）。墓誌も同様に自然の表情を生かしている。真壁小目石

の外柵では、背面（塔婆立部分）を橋幸夫さんが好んで描いた富士山をモチーフにデザインし、敷石にはバーナー仕上げを施して、石の風合いを残しつつ滑り止め効果を持たせている。

それら石の選択やデザイン、加工は、橋幸夫さんと真由美さんの思いを汲みながら大西社長が提案したもので、なかでも橋さん夫妻の心を動かしたのが、石碑の脇に据えられたお地藏さん。これは建て替え前の墓石（神奈川県産本小松石製）から制作（担当＝石神彫刻工房、宮城県川崎町）したもので、「幸夫さんもお参りの際には必ず最初に手を合わせていて、『石屋さんって、ここまで親身になって考えてくれるんだ』と感動していました」と真由美さん。この可愛らしい童地藏は、橋家の過去といまとをつないでくれる存在なのであろう。

「幸夫さんが亡くなったいま、このお墓は私にとって一番、心の落ち着く場所になっています。いずれは『私もここで眠る』。素直にそう思える、心やすらぐお墓ですね」  
真由美さんにはこやかにそう話した。（株）彩石のお墓づくりの真価が垣間見れた。

**彩石グループ**

## THE ZEN 倶楽部

**Benefit one**  
Dai-ichi Life Group

福利厚生サービス最大手・(株)ベネフィット・ワンと提携

### 檀家、信徒募集に繋がる 宗教法人の為の福利厚生

霊園や樹木葬など、  
寺社の基軸サービスを  
ご紹介できます！

ベネフィットステーション  
1100万人以上の会員向けPR

代理店を募集中です！

03-6801-8820

【運営元】〒112-0002 東京都文京区小石川 3-3-7 THE ZEN 株式会社 ((株) 彩石グループ) <https://the-zen.jp> [info@the-zen.jp](mailto:info@the-zen.jp)